

Title	『はだしのゲン』の計量的分析：表現変容プロセスに見る〈感性〉と〈理念〉の揺らぎ
Author(s)	大瀧, 友織
Citation	年報人間科学. 27 P. 121-P. 134
Issue Date	2006-03-31
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25895
DOI	10.18910/25895
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

『はだしのゲン』の計量的分析——表現変容プロセスに見る〈感性〉と〈理念〉の揺らぎ——

大瀧 友織

〈要旨〉

本稿では反戦・反核マンガとして知られる『はだしのゲン』を対象とし、作品内で用いられている言葉に注目して、計量的分析を試みる。これまで、マンガの重要な要素である絵やコマを捨象してしまうという理由もあり、計量的に分析するという手法は、ほとんど用いられてこなかった。しかし、計量的分析には難点がある一方で、従来の方法と比較して、作品全体の傾向を検討しやすいという重要な利点がある。

計量分析を用いて、吹き出しの種類など言葉の形式的な変化および、内容的な変化を検討し、全体の流れを読み取ることで、以下のことが明らかになった。『はだしのゲン』は、従来、反戦・反核メッセージを訴えているという点のみが強調されてきた。しかし、言及される語彙に注目すると「死」から「原爆」を経て「戦争」へと、具体的・直接的なものから、より抽象的・間接的なものへと推移していることが分かる。また、主人公であるゲンは、実は終始一貫しているというわけではなく、父などから教育された結果、反戦・反核の色彩を強めていったように思われる。また、訴え

の言葉は、一旦、より理念的なものになっていた。しかし、複数の語意の量的な変化を見ると、その後、安易に理念で語るのではなく、あくまでも個人的な経験・感性から主張するという方向が選択されていることが分かる。こうした表現上の工夫によって、結果的に、『はだしのゲン』は、単なる反戦・反核のプロパガンダではなく、マンガとしても面白い作品となったのだと考えられる。

キーワード

計量的分析、マンガ、『はだしのゲン』

1節 『はだしのゲン』の読まれ方

1 絵の印象と『はだしのゲン』

「私にとって先生のマンガは『聖書』と同じです」。この言葉は、ある『はだしのゲン』（以下、『ゲン』と表記）の読者が作者に宛てて送ったメッセージである（中沢一九九一）。聖書と同じという感想は、『ゲン』から受けたインパクトの大きさを物語っていると見える。

大学生を対象とした調査でも、『ゲン』が与える印象の強さははっきりと読み取ることが出来る。自由記述形式で『ゲン』についてのエピソードを尋ねたところ、「戦争」「原爆」「絵」「気持ち悪い」「怖い」「恐い」「印象」「リアル」「衝撃」「死ぬ」といった言葉が多く使われており、『ゲン』がどのように捉えられているのかが伺える。具体的な回答例としては、「怖くて夜、眠れませんでした」「途中で気分が悪くなったので、保健室に行くと、朝は何もなかったのに、三七・八℃ほど熱が出ました。また私だけでなく、数名の子ども達も同様に教室を出て行きました」「ストーリーはほとんど忘れてしまったが、原爆のはなしとなるとまっ先にこの絵が思い浮かぶ」「恐いという印象しか覚えていない」などが見られ、『ゲン』による衝撃の大きさが分かる。

このように大きなインパクトを与える要因としては、原爆を扱ったストーリーもさることながら、絵の印象の強さも挙げることが出

来る。たとえば、「『読んだ』というよりは『見た』といった方が正確なくらい」「絵が恐くて、ホラーマンガと同じような気持ちで、小学校の頃は読んでいました」「グロテスクな絵が、気持ち悪くなり、最後まで見れなくて、それ以来『はだしのゲン』という文字を見ただけでも気分がなりました。とても恐かったです」といった回答が、そのことを表している。

2 〈感性〉と〈理念〉

それでは、このように強烈な印象を与える『ゲン』は、どのような物語として読まれているのだろうか。多くの人は、この問いに対する答えはきわめて簡単なものだと感じるかも知れない。もっとも挙げられやすい回答は、言うまでもなく、反戦・反核という思想だろう。中沢啓治自身が「原爆を主題にした漫画を描くのはしんどいが、子どもらは素直に何が真実かを見きわめてくれます。（中略）戦争とは、原爆とはをわかっていただければ本望です」と語っているように、この答えが誤りでないことは確かである。

また、たとえば黒古一夫は、作者である中沢の思想の中核には反戦・反核があり、それが「怨念となって、マンガのコマ割りに噴出している」と指摘した。そして「戦争に勝てばどんなひどいことをしてもええのか」「アメリカが原爆でなん十万人の人間を地獄のように苦しめて殺す権利がどこにあるんじゃ」といった、主人公・ゲンの直接的な反戦メッセージを引用し、「小学校一年生か二年生のゲンに演説させる」と述べている（黒古一九八六）。

このように、従来から『はだしのゲン』は、ゲンが一貫して反戦・反核メッセージを訴えるマンガとしてのみ捉えられてきた。さらに黒古は『ゲン』は「〈感性〉レベルでの主張に終始」している点、つまり「自らの体験を他者の体験へと架橋する」思想化の部分に弱点があり、「〈感性〉から〈理念〉への回路を想定した表現」の追求が必要であると指摘している（黒古一九八六）。

しかし、反戦・反核のメッセージが、一貫的にかつゲンの口から語られているという捉え方だけで十分なのだろうか。また、思想化の作業が行われておらず、さらにそれは弱点として捉えられるべきことなのだろうか。本稿では、以上の点について検討することを目的とする。

2節 先行研究とデータ

1 従来のマンガ研究と本稿の分析方法

宮原浩二郎は、マンガを取り上げる研究方法は大きく二つに分かれると述べている。一つは批評的方法で、マンガ作品の内容を検討しながら分析するというものである。もう一つはメディア論的方法で、個々のマンガ作品の内容ではなく、マンガの読まれ方や機能、マンガに対する社会的認知などを研究対象とするものである（宮原二〇〇一）。「マンガが存在する限り、マンガ評論というものも存在していた」と呉智英が述べているように（呉一九八六）、批評的方法は歴史的に先行しており、その数も多い。

ただし、前者の作品の内容を検討する方法と一口に言っても、一作品にのみ注目する場合もあれば（黒古一九八六）、複数のマンガに言及しながら進めるといった方法もある（藤本二〇〇一）。また、作品内で何が語られているのかという、物語そのものについて検討する方法もあれば、吹き出しの有無やその形状、オノマトベがどのように用いられているのか、コマの構成はどのようになっていくのかなど、表現技法に注目するという方法も見られる（夏目一九九七、白旗一九九五）。

マンガを成立させる最低限の要素は、夏目房之介によると「絵とコマ」であるが、現在ではサイレント・マンガはごく少数であり、現在のマンガは上記に「言葉」を加えた三つの要素で成り立っている（夏目一九九七）。そのため、重要な要素である絵やコマを捨象してしまう計量的な分析は、マンガに対してほとんど行われてこなかった。マンガの文字情報をデータ化して分析する場合に、たとえ吹き出しの有無や形についての情報を含めて入力したとしても、削ぎ落とされてしまう情報は少なくないのである。

それにもかかわらず、本稿では基本的に『はだしのゲン』という一作品の内容を対象とし、かつ計量的な手法を採用する。マンガの言葉に対して計量的分析を用いるのは、次の二点の理由による。まず、計量的な分析手法は、従来の方法よりも作品全体の傾向を検討するのに適しているからである。『はだしのゲン』は、「普段マンガなど読みもしない良識の善導主義者に称讃され、そのためにマンガ好きたちは反発を感じて読まず嫌いになる」という「奇妙な読まれ

方」をしてきた作品である(呉一九八六)。一旦、そういったこれまでの読まれ方をカッコに入れて、改めて検討し直してみるためにも有効であろう。

第二に、マンガは元来、物理的な面積は言うまでもなく、視覚的に与える印象の大きさについても、絵のインパクトに対して言葉の比重は小さい。特にこの『ゲン』は、「絵」の印象に引きずられることが多かった作品であると思われる。そのため、方法論の一つとして、絵を捨象し、マンガの「言葉」＝「文字データ」を計量的に分析する意義は、決して小さくないと考える。ただし本稿では、従来のマンガ研究でも行われてきた吹き出しの形態などについてもデータ化しており、そういった言わば言葉の形式的側面も計量的分析の対象とする。そして、従来の『ゲン』の捉えられ方から一旦距離を置き、言葉によって実際に何が語られているのかを明らかにする。

2 データと分析の手順

本稿で扱うデータは、汐文社から出版されている『はだしのゲン』全一〇巻(全二六〇〇ページ)である。コンピュータ上で分析するために、すべての文字データを入力した。原則として、一人(人物無しの場合も含む)の言葉で、一コマに入っているものを、一つの文字情報として扱っている。その結果、文字データの総数は二六五一四ケースとなった。

データとして入力された内容は、巻号、ページ数、発話した人物名、発話内容、そして文字データの種類である。吹き出しの有無や

その形などの文字データの種類、つまり言葉の形式的な要素にも注目するのは、そのような「発語の記号体系」によってマンガの中の言葉が「どんな心理状態で発語されるのか」「どんな場所(登場人物の発語なのか気持ちなのか、ナレーション等作品の外から来る言葉なのか)から発せられたものか」を知ることが出来るからである(夏目一九九七)。そのため、マンガの言葉を入力する際に、文字データの種類を分類しておくことはきわめて重要な作業なのである。

夏目によると「マンガの中に登場する言葉には、大雑把に2種類あり、「セリフや独白、音喩など」と「ナレーションや解説など」であるという。本稿では基本的に夏目にならない、「吹き出し」「内語」「音喩」「ナレーション」のカテゴリを作成した。ただし、「吹き出し」についてはその形によって標準(もっとも多くの吹き出しの形である風船型)と破裂型に分類している。「音喩」とは、夏目の造語であり、オノマトペ的なものをすべて指している(夏目一九九七)。マンガにはさまざまな擬音語・擬態語が用いられているが、それらは従来のオノマトペの範ちゅうに留まらないからである。

さらに、吹き出しに入っていないセリフを「吹き出し外セリフ」、作品内の看板に描かれている文字やポスターの言葉などを「背景」として分類した。前者は手書き文字で書かれることが多く、後者はナレーション等とは異なり、作品中の登場人物たちがその文字を視認出来るという点に特徴がある。以上のように、『はだしのゲン』の文字データを七種類に分類し、その出現度数とパーセンテージを

示したものが、表1である。約八〇%が「吹き出し」であり、以下、「音喩」「背景」が続いていた。

本稿では、以下の手順でマンガの言葉を計量的に分析する。

第一に、言葉の形式的な部分に注目する。吹き出しの有無やその種類が代表的なものになるが、他にはセリフに使われる文字数の多少や、それらのセリフがどのくらいの人数によって語られているのかといった点について検討する。こういった形式的な部分の変化に注目するのは、語られている物語の展開と大きく関連していると考えられるからである。

第二に、言葉によって実際に何が語られているのか、つまり言葉の内容的な部分に注目する。ここでは、これまで反戦・反核のマンガとして捉えられてきた『ゲン』を検討するにあたり、戦争や原子爆弾への言及を中心に分析を進める。これまで考えられてきたように、一貫してそういった内容への言及がなされているのだろうか、また何らかの変化が見られるとしたら、それはどのように変化するのだろうか。以上のように、言葉の形式と内容の変化に注目して、両者を関連づけながら検討を進めたい。分析に際して、本稿ではテキスト型のデータを計量的に分析するために、KH Coder²¹を用いる²²。

表1: 文字データの種類の

	度数	パーセント
吹き出し (標準)	17964	67.8
吹き出し (破裂型)	3553	13.4
音喩	2121	8.0
背景	1822	6.9
吹き出し外セリフ	545	2.1
内語	375	1.4
ナレーション	134	0.5
合計	26514	100.0

うプログラムを用いる²¹。

3節 『はだしのゲン』が語っていること

1 言葉の形式的変化とメッセージ性の高まり

(1) 文字データの種類の変遷

この項では、文字データの種類の変遷や登場人物たちが語る言葉の長さ、言葉を話す登場人物の数など、言葉の形式的な部分について検討していく。表2は、巻号ごとに文字データの種類がどのように推移しているのかを示したものである。ここからいくつかわる変化を読み取ることが出来る。まず、「吹き出し(破裂型)」がやや複雑な変化を示しながら、前半に比べて後半で増加している点である。破裂型の吹き出しは、「語気を強めている」ように読めると指摘されている通り(夏目一九九七)、私たちはあのギザギザした形の吹き出しを見ると、登場人物たちが普通に話しているのではなく、叫んでいるように感じる。つまり、「吹き出し(破裂型)」は、言わば激しい感情表現の現れであり、そういった表現は物語の展開を知る上でも重要である。巻号ごとに見ると、原爆投下の場面が描かれる1巻では十四%を越えているものの、2巻で急激に減少し、その後5巻をのぞき徐々に増加していく。物語上では9巻の序盤にゲンの家が撤去されるという場面があり、ここで「吹き出し(破裂型)」の割合が最も高くなるために、9巻で二〇%を越えるが、10巻では再び減少している。

次に、「内語」および「ナレーション」が減少している点である。いずれもその割合こそ大きくはないが、ほぼ一貫して減少している。つまり、それまでの内だけで語っていた言葉を、登場人物たちは後半になるに従って声に出すようになってきたのではないだろうか。また、ナレーションのように作品内部に語り手がいない場合、おおむね「ニュートラルで超越的な場所」からの発語であると指摘されている（夏目 一九九七）。その点を考慮に入れると、『ゲン』の物語はよりニュートラルなものから、そうではないものへと変化してきたと解釈することも出来るのかも知れない。

表2：巻号と種類の変遷

	吹き出し (標準)	吹き出し (破裂型)	音喩	背景	吹き出し 外セリフ	内語	ナレシ ョ	合計
1 巻	64.0	14.3	11.8	4.4	1.1	2.7	1.7	3148
2 巻	73.2	8.2	10.8	1.2	3.5	2.6	0.6	2437
3 巻	75.1	11.3	7.1	0.6	3.1	2.2	0.6	2727
4 巻	74.1	11.2	7.5	3.1	2.4	1.4	0.3	3278
5 巻	76.5	8.7	7.7	3.2	3.0	0.6	0.3	2478
6 巻	69.9	14.9	6.8	5.5	1.5	1.2	0.1	2488
7 巻	72.0	15.2	5.3	4.5	2.0	0.7	0.2	2286
8 巻	66.1	15.1	5.6	10.0	2.0	0.8	0.2	2426
9 巻	54.7	20.6	8.3	14.5	0.8	0.7	0.4	2480
10 巻	52.2	15.1	8.1	22.4	1.3	0.8	0.0	2766
合計	17964	3553	2121	1828	545	375	128	26514
合計%	67.8	13.4	8.0	6.9	2.1	1.4	0.5	100.0

また、特に10巻における「背景」の増加が印象的である。前半では1ヶタ代で推移していたが、次第に増加し、二〇%を越えるに至っている。このような変化が生じたのは、『ゲン』が戦争末期から戦後とその復興の過程が舞台となっていることによる。1巻の終わりでは原爆が投下され、ゲン達は焼け野原となった広島で生活することになる。その後、少しずつ復興していく中で、広島には建物が建ち並び、看板やネオンの文字が現れてくるからである。8巻以降で減少している「吹き出し（標準）」は、極端な「背景」の増加を受ける形で相対的に減少している。

(2) セリフの長さや登場人物数の変遷

表3は、各巻におけるゲンのセリフの平均文字数、登場人物すべてについての平均文字数、その差、そして登場人物数を示したものである。まずゲンのみの平均文字数に注目すると、4巻まで徐々に増加した後、一旦減少し、7、8巻では大幅な増加を示すが、9、10巻ではまた減少している。

全体での平均文字数についてもほぼ似たような傾向であるが、ここで両者の差に注目してみたい。1巻ではマイナスの値になっており、全体の平均に比べてゲンのセリフが短くなっていることが分かる。しかし、すぐに逆転してその差は次第に広がっていく。つまり、他の登場人物に比べて、ゲンが長く話すようになっていくのである。つまり、『はだしのゲン』は、基本的に前半よりも後半において言葉が多くなっている。特に主人公であるゲンのセリフが長くなり、

全体との差が広がっている部分では、マンガとして「理屈っぽく」なっているという印象を持たれる可能性もあるだろう。

ところが、7巻でピークを迎えたあと、再びその差は小さくなる。8巻については太田という教師や、その太田と議論を交わす生徒・相原など、セリフの長い人物の登場による影響もあるものの、彼らの退場後もその差は小さいままである。つまり、ここまでより長く

話すようになってきていたゲンは、これ以降突出して長いセリフを語るようになってきたのである。

また、登場人物数に目を向けてみると、1巻の四四人をピークとして後半では十人台とかなり減少していることが分かる。つまり、多くのエピソードが語られ、さまざまな登場人物が現れるという形から、次第にあまりキャラクターが入れ替わらず、少数の大きなエピソードが語られる方向へと変化していると考えることが出来る。

言葉の形式的な部分については、以上のような変化が生じている

表3：巻号別平均文字数（背景・音喩・ナレーション以外）・登場人物数

	平均文字数		文字数の差 ゲン-全体	登場人物数 (5回以上登場)
	ゲンのみ	全体		
1巻	18.3	19.9	-1.6	44
2巻	19.3	19.1	0.2	22
3巻	20.4	19.9	0.5	22
4巻	21.2	19.7	1.5	42
5巻	20.4	19.2	1.2	24
6巻	20.2	18.8	1.4	16
7巻	24.2	22.3	1.9	16
8巻	25.2	24.7	0.5	18
9巻	23.7	23.2	0.5	14
10巻	24.3	24.0	0.3	16

ことが分かった。ここまで検討してきた、後半での「吹き出し（破裂型）」の増加や、ゲンのセリフが長くなっていたことなどから、『ゲン』は後半でこそ、そのメッセージ性が強まっていると考えることが出来る。ただし、「吹き出し（破裂型）」や、平均文字数および文字数の差の推移など、一方向的でない変化も見られ、8巻の前後で何らかの転機があることが伺える。次項では、具体的にどういった内容が語られているのか、頻繁に使われている語彙を計量的に抽出し、それらがどのように変化しているのか検討していく。

2 言葉の内容的变化とゲンの揺らぎ

(1) テーマ語の推移

それでは、『ゲン』の物語において、具体的にどのような言葉が使われているのだろうか。表4は、頻出語彙三〇語とその出現度数を示したものである。まず目につくには、「あんちゃん」「元」「隆太」「ねえちゃん」「進次」といった登場人物の名前や呼び名である。「あんちゃん」については、「隆太」や「進次」がゲンを呼ぶ場合や、ゲンが自分の兄を呼ぶときに使われるために、最も出現度数が高くなっている。このように登場人物が上位に来るという傾向は、小説を対象とした分析でも、同様であることがすでに指摘されている（谷口二〇〇二、二〇〇三）。

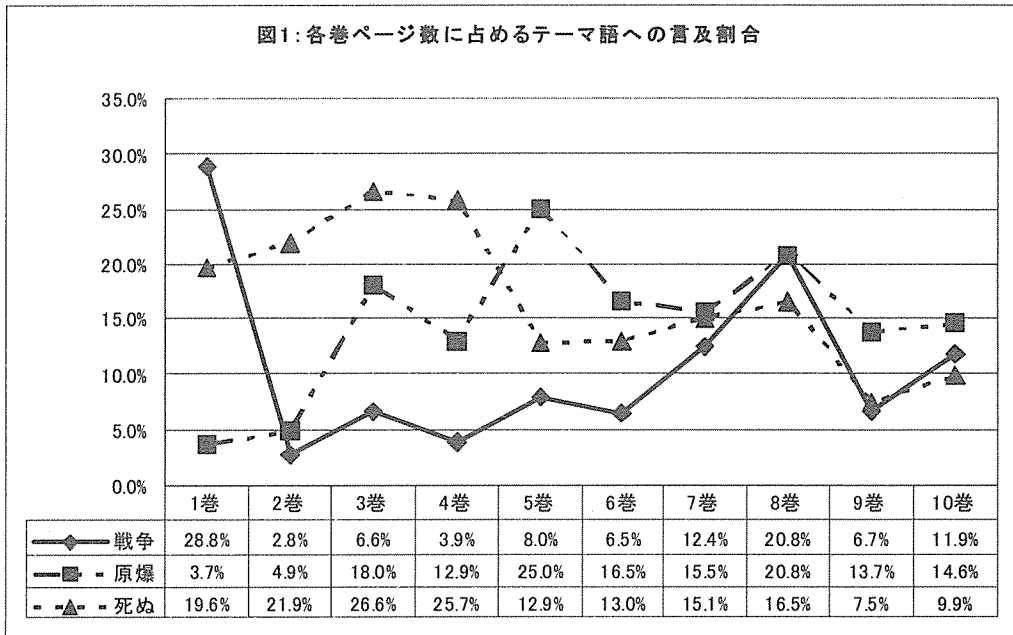
ここでは、物語の中で何が語られているのかを検討するために、そういった登場人物以外の言葉に注目する。人物以外で最も出現度数の高い言葉は、〇二回使われている「死ぬ」である。最も使われ

ている動詞が「死ぬ」であるというマンガは、ちょっと他には見あたらないのではないだろうか。次いで使われているのは、598回の「原爆・ピカ」、531回の「戦争」となっている。これらの三つの語彙は、「言う」というきわめて一般的な動詞よりもはるかに使用されていることが、その出現頻度から分かる。そこで、『ゲン』のテーマとして考えられてきた「戦争」「原爆」に加えて、「死ぬ」という語への言及を合わせてテーマ語とし、その推移について検討していく。図1は、それぞれの巻号の総ページ数に占めるテーマ語への言及割合を折れ線グラフで示したものである。

図を見る、まず1巻で「戦争」への言及が例外的に高いことが分かる。これは後でも述べるが、1巻のラストで原爆が投下され、終戦を迎えるまでは戦時中であるため、言及割合が非常に高くなっているのだと考えられる。この1巻での「戦争」をのぞくと、前半部では「死ぬ」への言及割合が総じて高くなっていることが分かる。その後「原爆」への言及が徐々に高くなってきて、5巻でその割合

表4：頻出語彙30語とその出現度数

語彙	度数	語彙	度数
1 あんちゃん	917	16 いま	243
2 元	827	17 いや	240
3 死ぬ	652	18 金	239
4 隆太	605	19 先生	231
5 原爆・ピカ	598	20 おかあちゃん	229
6 戦争	531	21 子	226
7 言う	367	22 アメリカ	223
8 生きる	337	23 帰る	216
9 ねえちゃん	312	24 かあちゃん	209
10 人家	283	25 だめ	198
11 人家	280	26 友子	198
12 元氣	272	27 政二	195
13 日本	268	28 とうちゃん	186
14 殺す	262	29 中岡	184
15 進次	255	30 お母ちゃん	181



が逆転している。さらに「原爆」への言及が減少傾向を示す中で、「戦争」が増加している。およそそのような流れがあると思われるので、どのような物語が語られているのか確認しながら、各テーマ語について検討しよう。

「死ぬ」については、1巻でもかなり高い割合を示しているが、3巻でピークを迎えるまで増加傾向を示している。1巻の終盤で原爆が投下され、ゲンは目の前で父と姉、弟を失う。それでも、母から改めて家族の死を告げられた時、ゲンは現実を受け入れることを拒絶して「おかあちゃんのばかたれー、もう、死んだなんて、いー、いなー」と叫ぶ。しかし、焼け跡から家族の骨を掘り出したことで「進次も、ねえちゃんも、とうちゃんも、ほんとうに死んでいた」と受け入れることになる。

家族の死後も、焼け野原となった広島島の惨状は描かれる。火傷を負い、水が欲しいとゲンに声をかけた人は、水を与えられてすぐに息を引き取る。また、死体処理をしていた兵隊は、突然髪の毛が抜け落ちてしまい、寒気を訴え、血を吐く。「兵隊さん、だめじゃないか、かんたんに死んじゃ。目をあけるよ。うわーん、どうしてみんな死ぬんじゃ」と兵隊の死に泣き出すゲンは、このようにさまざまに人の死を目撃することになる。

このような過程で、ゲンは、絵を描くのが好きな青年・政二と出会う。彼は原爆を受け、体中に火傷を負ったために、兄夫婦と姪たちからも冷遇されている。ゲンは、一日3円という給料で彼の世話をするようになったが、程なく政二は息を引き取る。その死に対し

て、姪たちは「政二おじさんが死んで、もう、おばけ屋敷だときらわれないから、あたしらうれいよ」と事も無げに話すのである。原爆を受けた政二と暮らしていたためにじめを受けていた姪たちと、死してなおこのように言われる政二を見て、「原爆をうけたら、ほんとうに地獄じゃのう」「原爆のばかたれ、ばかたれ、ばかたれ」と、ゲンは原爆に対する怒りをあらわにする。

また、「原爆」については、「ピカのやつ、とうちゃんやねえちゃんや進次をやき殺した」というようなゲンの言葉の他にも、「原爆をおとして、とうちゃんとかあちゃんを殺した上に、あたしの頭をハゲにした」「原爆をおとされ、おやじたちを殺され」「元、あのピカドンは、原爆は。死ぬも地獄。生きるも地獄だね。あのピカさえなかったら」といった形で、家族を失った少女や、ゲンの兄、ゲンの母の言葉でも言及される。このように、ゲンたちのまなざしは、次第に多くの人がただ「死んだ」のではなく、「原爆」によって殺されたのだという点に向けられていくことが分かる。

ゲンは、父や姉弟に続き、原爆投下の日に生まれた末の妹である友子を失い、さらに原爆症で苦しんでいた母を失う。物語でゲンの家族の死が描かれる中で、「原爆」への言及割合はやや減少するが、「戦争」への言及は徐々に高まっていく。このように、テーマ語が「原爆」から推移していく過程で、「戦争」がどのような形で言及されているのかを見てみよう。

「わしゃこの目でみてきたんじゃ。ピカで虫けらのように殺されていく戦争の本当の姿を。すべてが、すべてがなくなるんじゃ」

「戦争を利用して、原爆の実験をした人殺しのおそろしい犯罪者」「いままでさんざん戦争と原爆でひどい目にあわされ。またわしらは戦争にまきこまれ爆弾をおとされて死んでいくかしれんのだぞ…」といったゲンの言葉から伺えるのは、「原爆」という直接的に死の原因となった兵器から、その原爆が使用される背景にある「戦争」へとまなざしが向かっているということである。具体的に物語を確認しても、やはりテーマ語の推移には、およそ「死ぬ」↓「原爆」↓「戦争」という流れがあると捉えることが出来るのである。

前項で検討したことを合わせて考えると、物語が進行するとともにメッセージ性が強くなり、同時に個人の感性に最も近いところにあると思われる「死」から徐々にその背景にある「戦争」へと、テーマが抽象化しているということが分かる。

(2) ゲンの変化

図1で示したように、「戦争」への言及は8巻に至るまで増加していく。ただし、この第二のピークは、言及割合が最も高い1巻での「戦争」とはやや趣を異にしている。なぜなら、1巻での「戦争」はあくまでも戦中の場面で使われており、言及が多いのは戦争に反対するゲンの父と、それを非国民だとのしる周囲との衝突によるところが大きいからである。「戦争」への言及割合が最も高い1巻において、ゲンはこれまで語られてきたこととは違った一面を見せられている。反戦を主張する父に対しては「とうちゃん、戦争にいつて、たくさん敵を殺して勲章もらってくれよ。戦争に反対するとうちゃん

んはきらいだ。非国民といわれるとうちゃんはきらいだ」と訴え、敵機が攻めてきた場面では、「やれーっ。アメ公をたたきおとせ」とはしゃいで見せる。

つまり、ゲンが後に反戦・反核を強く訴えるようになるのは、実は父の教育によるところが大きく、最初から一貫して、ゲンの口から反戦・反核の主張がなされているわけではなかった。戦争に反対したために警察に連行され、取り調べを受けたゲンの父は、「いまの軍国主義の日本で、戦争に反対すると、こうなるんだ。心配はいらん。体は傷つけられても、心の中で傷つけられはせんわい。元！進次！自分が正しいと思ったことは、安っぽくまげちゃいけんぞ」と子どもたちに伝える。それを受けてゲンは素直に転向し「ぼくのとうちゃんは、日本は戦争してはいけないといえます。戦争は、人の命をうばって、なにもかもこわしてしまふ…と。ぼくもそうだとおもいます」という作文を学校で発表するようになるのである。

ゲンのこのすぐに教育を受け入れる、あるいは人からの影響を受けやすい傾向は、他にも見られるし、既に述べた政二との出会いによって「原爆」への怒りを強めたことにもよく現れている。このようにして、ゲンは言わば、反戦教育を受ける存在から、反戦教育を広める存在へと変わっていくのである。また8巻では、文字通り先生役である教師・太田と出会うことで、ゲンはさらに変化する。太田は「いまの日本の平和憲法ができたのも戦争と原爆によって三百万人以上の日本人が殺され尊い犠牲があつてできたんじや」と教室で反戦を訴え、デモに参加するが、そのために学校を追われてし

まう。

その太田の影響は、ゲンが使う言葉遣いに如実に表れる。たとえば「大国の主義主張のために代理戦争をさせられ、そこに住む国民はもがき苦しんで死ぬるだけじゃ。人間は進歩せんのおう。どうして話し合って解決できんのじゃ……」といったゲンのセリフに見られる、主義主張、代理戦争といったものの他に、大義名分、行政、民主主義、主権在民など、それまでまるで使わなかったような言葉を、ゲンは発するようになる。

ここまで検討してきたことから、メッセージ性が高まる中で、テーマ語はより抽象的なものへと推移し、さらにゲンは少しずつ変化し、より広い視点で語る言葉を獲得していったことが分かる。ここには、まさに〈感性〉から〈理念〉への回路、思想化の萌芽を見出すことが出来るのではないだろうか。ところが、興味深いのは、太田の影響で使うようになった言葉を、ゲンは再び使わなくなるといふ点である。これまで、やや素直すぎる程に人からの教育を受け入れていたゲんに、なぜこのような揺り戻しとも言うべき変化が生じたのだろうか。

4節 個人の〈感性〉に踏みとどまることの意義

ここで、作者・中沢啓治への相反する評価を見ておきたい。呉は、中沢作品である『黒い雨にうたれて』の解説において、石子順の言葉を引用して明確に批判している。石子が「怨念は心情的な情念に、

こもりがちであるが、中沢啓治は、そうした個人的な世界にだけでおわっていない」「怨念の旗をたばねて、行動の旗へと変容させていく行為なのであろう」と述べるのに対して、呉は「正気とは思えない」と批判する。さらに、「ここに描かれているのは、『行動の旗へ変容』などするはずのない徹頭徹尾『個人的な』『情念』ではないか。我々は安易に戦争体験や被爆体験を理念的に語りたがる。しかし、そんな安易な理念で語り尽くせるのなら、戦死者戦傷者も被爆者も苦しみはしない。被爆という悲劇を一身に背負う不条理に参み出すような痛みが中沢啓治を創作に駆りたてているのである」と続けている(呉 2005)。

それに対して、『ゲン』をはじめとする中沢作品が、個人の情念に留まっていると指摘する点では一致しているものの、黒古の評価はまったく異なったものになっている。「〈感性〉から〈理念〉への回路を想定するところに、〈ことば〉を使う人間の方向性は定められるべき」だと述べる黒古は、「このことが軽視されるとき、〈表現〉の墮落がはじまる。それは〈感性〉にのみ依拠している中沢啓治の原爆マンガにも、あてはまる」と、批判するのである(黒古 一九八六)。

しかし、本稿で『はだしのゲン』全10巻を計量的に分析し、全体の流れを明らかにしてきた結果、『ゲン』には、「〈感性〉から〈理念〉への回路」がないわけではないということが分かった。少なくとも、言葉の形式および内容的な変化において、思想化への萌芽を見出すことは出来た。ただし、教師・太田の影響を受けて、よ

り理念的な言葉で語り出したゲンは、まるで揺らいでいるかのよう
に、8巻以降ですぐにそういった言葉を使わなくなっていた。これ
まで検討してきたように、8巻前後が一つの転機となっていた。

また図1のテーマ語への言及割合を見ても、8巻から9巻にかけ
ては、どのテーマへの言及も少なくなっている。全体の流れでは
「死ぬ」から「原爆」を経て「戦争」へと推移してきたが、特にそ
の「戦争」への言及割合の減少が最も大きくなっている。このよう
な変化が、ある一時期に集中していることは、恐らく偶然ではない。
セリフが長くなり、難しい言葉を使い、理屈っぽくなったゲンを、
中沢は意識的に（そして恐らくは無意識的にも）揺り返しをさせた
のである。以上のことから考えると、思想化の作業がなされていな
いと捉え、さらにそれを弱点だと捉えるのは、やや単純に過ぎるの
ではないだろうか。

そして、ゲンに見られた揺らぎは、まさに中沢の揺らぎでもあつ
たのではないだろうか。〈感性〉のまま語り続けるべきか、あるいは
〈理念〉を語るのか。一旦、黒古の言う「思想化」の道を辿りな
がら、『ゲン』はそれを拒絶した。ゲンの、そして中沢の経験は、
呉が言うまでもなく、安易な〈理念〉で語り尽くすことなど到底出
来るはずもない。そこで辿り着いたのが、個人の〈感性〉に踏みと
どまり、主張し続けることだったのである。そして、個人の〈感性
〉で語り続けることを選んだことが、結果的に『ゲン』を単なる反
戦・反核のプロパガンダではなく、マンガとしても面白い作品にし
たのではないだろうか。

注

(1) 四四・六%の人がマンガ『はだしのゲン』の一部を読んだと答えて
いたのに加え、二三・六%の人が全巻を通して読んでいた。つまり、
七割弱の人が、『ゲン』の一部または全部を読んでいる。さらにアニ
メ映画、実写映画を含めると、およそ九割近くの人が中学校入學以
前に『ゲン』に触れていた。

(2) もちろん、1コマの登場人物数や、1ページのコマ数をカウントす
るなど、方法によっては絵やコマが部分的に計量的分析の俎上に載
せられる可能性はあるだろう。

(3) 本稿では夏目(一九九五)にならいつつ、独自のカテゴリを加え分類を
行った。ただし、マンガに現れる言葉は多種多様であり、分類基準
によって作成すべきカテゴリが変わってくる可能性は考えられる。
したがって、今後マンガにおける言葉を対象として分析を進める際
には、こうした分類に関して再考の余地があるだろう。

(4) 詳細については、樋口(二〇〇四)を参照されたい。

(5) 笹本純は主に少女マンガを取り上げて、内語を発する登場人物は
「読者の共感を得る視点所有者」であり、「見られるだけの存在」で
ある強者に対する、相対的な弱者であると述べる(笹本二〇〇二)。
このことを踏まえると、内語の減少は私たちが作中人物の視点から
作中世界を眺める機会が減り、相対的弱者としての登場人物が減っ
たのだと考えることが出来る。ただし、次の二点から、少年マンガ
である『ゲン』についてはより詳細に検討する必要があると考える。
第一は、文字データの種類における内語の割合が低かった点である。
またこの割合が他の作品と比べて高いのか低いのかという点も調べ
る必要があるだろう。第二は、少年マンガと少女マンガでは事情が
異なることが考えられるという点である。内語の比重が少年マンガ
では少ないのに対して、少女マンガでは多いという点が、両者を区

別する「恐らくは唯一の基準」ということがすでに指摘されている
(大塚 一九九四)。

(6) たとえば、「朴さん、先にかえってくれよ。非国民といわれたうえに、おまけに朝鮮人といっしょとばかりにされたらたまらんよ」と朝鮮人に辛く当たっていたゲンは、父からの教育(「朝鮮の人や中国の人みんなと仲よくするんだ。それが戦争をふせぐたっつひとつの道だ」)を受けた後、素直に謝罪する。さらには、「もう朝鮮の人をばかにするな。このばかたれ」と自ら注意する側に回っている。

文献

黒古一夫 一九八六『反戦・反核・反天皇制…中沢啓治『はだしのゲン』を読む』『月刊社会党』三六七、九八、一〇七。

大塚英志 一九九四『戦後まんがの表現空間…記号的身体の呪縛』法蔵館

呉智英 一九八六『現代マンガの全体像…待望していたもの超えたもの』情報センター出版局。

—— 二〇〇五『黒い雨にうたれて』解説「中沢啓治『黒い雨にうたれて』デノボックス。

笹本純 二〇〇二『マンガの語りにおける視点とその決定因としての内語』

ジャクリーヌ・ベルント編『マン美研…マンガの美/学的な次元への接近』醍醐書房 一九四、二二六。

白旗直樹 一九九五『吹きだしは何を伝えているか?…形を変えると意味まで変わる謎の情報風船』『別冊宝島DXマンガの読み方』宝島社。

一三八、一四五。

谷口敏夫 二〇〇二『奔馬』の小説構造可視化…三島由紀夫『豊饒の海』の絵解き』『京都光華女子大学研究紀要』四〇。

谷口敏夫 二〇〇三『暁の寺』の小説構造可視化…三島由紀夫『豊饒の海』の絵解き』『京都光華女子大学研究紀要』四一。

中沢啓治編 一九九一『はだしのゲン』への手紙』教育資料出版会。

夏目房之介 一九九五『言葉と絵の迷宮…マンガにおける絵と言葉の微妙

な関係』『別冊宝島DXマンガの読み方』宝島社 一五二、一五九。

—— 一九九七『マンガはなぜ面白いのか その表現と文法』日本放送

出版協会。

樋口耕一 二〇〇四『テキスト型データの計量的分析…2つのアプローチ

の峻別と統合』『理論と方法』一九(二)、一〇一、一二五。

藤本由香里 二〇〇一『分身…少女マンガの中の『もう一人の私』』『マン

ガの社会学』世界思想社 六八、一三二。

宮原浩二郎 二〇〇一『知的触媒としてのマンガ』『マンガの社会学』世界

思想社 四三二。

The Quantitative Analysis of "Barefoot Gen": <Sensitivity> and <Idea> in a Process of Expression Changing

OTAKI Tomoori

This paper presents an quantitative vocabulary analysis of a Japanese comic series, "Hadashi no Gen (Barefoot Gen)", a series well-known as of anti-war and anti-nuclear sentiment. It is true that quantitative vocabulary analysis has downside if applied to visual works like comics, because it ignores both the frames and the pictures of it, but, it can, on the other hand, make the long trend of the whole series visible as it pursues the changing features of the used vocabularies.

By analyzing both the formal aspects of the balloons and the contents of them quantitatively we could grasp the general trend of the series. Three points deserve to be noticed here. First, focusing on the used vocabularies we could conclude that the main subject of the story moves from "death", through "atomic bomb", to "war", that is, from concrete experiences to more abstract and indirect issues. Second point is the fact that the leading character Gen's antiwar ideas were never consistent all through the story, but, it seems, rather a product of his father's education. Thirdly, when we follow up the several of the vocabularies used by Gen to the end of the series, it is evident that his ideas have once become quite ideational in the series but soon turns back to his personal and subjective experiences. By adopting these strategies to express its antiwar and antinuclear sentiment, the work could successfully avoid the labeling of "propaganda comics" and enjoy good reputation in the field of "manga."

Key Words : quantitative analysis, manga, "Barefoot Gen"